

シリーズ

阿久比を歩く ⑦③



阿久比町と常滑市との境界

今回から阿久比町の境界線にぶらり旅に出掛けることにした。役場から常滑市との境を目指して、友人と二人で西へ向かって歩く。地図を片手に進むが、目印になるものがなく境界を探すのはなかなか難しい。看板に目をやると「常滑市」の表示があつたので歩く方角を左手に折れ、南に向かう。天候は晴れ。真つ青な空には飛行機が通つた跡が白く十文字に残る。

境界線を行く ⑦

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

田んぼの土手にタンポポが咲き、ミツバチが花の周りを飛ぶ。ピチ、ピチ、ピチ、ピチ、鳥がさえずる。「春ですよ。」と「ちよつと聞いてくれるか。きのう車に乗つて信号待ちしていたら、フロントガラスに『ボタツ』とヨーグルトみたいなものが落ちてきて、びっくりしたんだよ。カラスの仕業で、その量が半端じゃないんだ。くそー。」「春本番を迎え、運が付いたじゃないですか。」「……」舗装された道、砂利道、常滑市との境界だと思ふ道を進む。無心で歩く。人氣はまったくない。途中坂道になり前方の景色が見えない。どこを歩いているか不安になる。頂上が近づくにつれて先が開けてくる。ようやく目の前に阿久比町、常滑市、半田市が入り組む「半田池」が見えてきた。一つ峠を越える。常滑市との境界に別れを告げ、半田市との境界になる矢勝川沿いを歩く。川を隔てた雑木林でウグイスが鳴く。「ホー、ホー、ケキョー」鳴き方

はぎこちないが確かにウグイスだ。しばらく耳を澄ます。ウグイスは鳴き声の練習を繰り返す。三回目の鳴き声が「ホー、ホー、ケキョー」に変わる。思わず拍手をした。とてもウグイスな気分だよ。」「そうですね。グツ、グツ、グツ、グツ、グツですよ。」「春らしい絶好調な会話が流れる。サイクリングを楽しむ人たちは、気持ち良さそうに風を感じながら、私たちの横を通り過ぎていく。二人とも疲れのピークを感じて会話がなくなる。高田橋まで来た。目が会ったので、軽くうなずき今日のぶらり旅を終えることにする。近くの植大駅から電車に乗り出発地点に戻った。次回につづく。



知多半島サイクリングロード 合流点

シリーズ

阿久比を歩く ⑦④



阿久比町と半田市の境界にある竹やぶの中

阿久比駅から名鉄電車に乗り、半田口で降りて、前回歩き終えた高田橋まで戻り、再び半田市との境界を歩き出す。
矢勝川堤防の桜は、ほぼ満開。広がる田園の土手に咲く、菜の花のにおいが風に乘って流れてくる。
阿久比川の上に掛かる島田橋を渡る。境界は川を隔てた南側になる。県道55号線を書く。
半田橋付近の交差点に、阿久比町

境界線を行く ②

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

と半田市の境を示す標識が立つ。県道南粕谷半田線を横切り、地図や民家の郵便受けの住所を見ながら境界だと思ふ道を進む。
ほとんどの田んぼは、間もなく始まる田植えに備えて、田起こしが終わり、土がでこぼこに隆起する。あぜ道には雑草が芽吹き、その間からツクシが背を伸ばす。
「子どもたちが摘んできたツクシを卵とじにして食べたんだよね。苦味が少し気になったけど、子どもがせっかく取ってきてくれたから『おいしい』と言いつつながら食べたよ」と私が友人に話し掛ける。「いいお父さんしてるじゃないですか」「『おいしい』と言ったばかりに、子どもたちは、毎日のようにツクシを摘んできて、しばらくツクシ料理が続いたよ。(笑)」
地図を見ながら歩いてきたが、境界と思われる道が地図上では分からなくなってくる。舗装されていない砂利道を行くと牧場にたどり着き、さらに進むと畑が見えてきた。

ついに限界がくる。進む道がなくなってしまう。未知の世界に入り込む。人気のない場所に軽トラが止められる。もしかして誰かいるのでは」と思い、探してみると畑で鎌を持つ老人の姿が。
事情を話す。八十一歳になるという男性が「ここからは、もう道はないよ。わしについてきなさい」と言ってくれたので、老人の後に続く。竹やぶの中に入っていく。
私たちは探検家になった気分。友人の顔が少し青白い。「この奥が池だなあ。昔は泳いだ。ここに桃の木があつてなあ。この辺りがちょうど、阿久比と半田の境界だ。これ以上あんなただけで行くと、帰って来れんかもしれないなあ。目印も何もない竹やぶの中を、男性がいていいいに案内してくれた。
いい出会いがあり、二人では入り込めない場所にも行くことができた。次回、道なき道をどう進んだらいいか不安だが、しっかりと前を見て歩こうと思う。



田んぼの土手に伸びるツクシ

シリーズ 阿久比を歩く ⑦



境界の西は開発が進み、遠くには宮津団地

前回まで進んだ場所から地図上に道はない。雑木林が広がる付近に境界が存在する。前に進むことができないため、屋郷池の脇道を東へ抜けて半田市の方から回り道をする。養鶏場の前で番犬にほえられる。「うちの愛犬は、花火や雷が鳴るとよくほえて、人が来るとほえずに寝てる、まぬけな犬なんだよね」。友人は「飼い主に、似るって言いますよね」と舌を出す。

境界線を行く ③

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

畑で仕事をする女性に「阿久比の方へ行こうと思ってるんですが」と道を尋ねる。女性は前方の道を指して「昔は行けたけど、今は途中から歩ける道じゃないよ」と教えてくれる。

「行けるところまで」という気持ちで前に進む。「僕の好きだったスポーツ選手が引退のときに『この道を行けばどうなるものか。危ぶむなかれ。危ぶめばそこに道はなし。迷わず行けよ。行けば分かるさ』と言っていたけどまさにその心境だなあ」と私が友人に話し掛けると「危険なことはやめましょう」と冷静な答えが返ってくる。

人里から少し離れた道の途中の民家から、西の方角を眺めると、宮津団地の建物が遠くに見え、目の前では宅地開発が進む。

この民家よりも先は、行き止まりのようだ。私たちがうろうろしているのが怪しいと思つてか、家の中から男性が現れる。

事情を話す「わしの住んでいる場



シダが生い茂る山道

所は半田市。この垣根からは阿久比町だよ。ついこの前までは山だったのに、すぐく見通しがよくなったなあ。ここから先は無理だよ。友人が言うように危険なことは避け、再び回り道をする。

境界部分から離れてしまった。このまま進んでしまつては「境界線を行く」にはならない。かなりのロスにはなるが上長根池まで行き、先ほど話を聞いた男性の家を確認するため、池の横の山道を南の方へ歩く。清水が湧くのか、道はぬれて足場が悪い。脇の土手には青々とシダが生い茂る。しばらく歩いた高台から男性の家が見えた「まあこれでよしとしよう」二人の気持ちが一致。来た道を引き返す。

「すべてで転ぶなよ」と言つた矢先、私が水たまりにはまり、友人は二回転んだ。頑張つて県道西尾知多線まで歩を進めた。次回につづく。

シリーズ

阿久比を歩く ⑦⑥



高根台の道路脇に咲く ツツジ

県道西尾知多線の阿久比町、半田市、東浦町が交わる場所から歩き始める。田んぼや雑木林の中に境界が入り組んでいる。行き止まりになれば、来た道を戻り、とにかくある道を進む。広い道路にぶつかり、地図と地形が一致する場所が確認できたのでそのまま道なりに歩く。左手に阿久比町、右手に東浦町の分かりやすい境界がしばらく続く。

境界線を行く ④

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

早くも田んぼでは、田植えをする光景が見られる。田植機が広い水田をアメンボのように気持ちよく進む。「田んぼに足を入れると、ズボツとはまって、なかなか前に行くことができないのに、重たい機械があんなに自由自在に動けるのは不思議ですよ」と友人が首をかしげる。「そうだよ。いまだに飛行機が空を飛べる理由が分からないもんねえ。」「お互い機械に弱いですよねえ。」(笑)

県道東浦阿久比線を横断。北西に向かう。日差しも強く、新緑がまぶしい。田んぼや畑が四方に広がり、あぜ道の草を刈る機械の音が響く。坂道を登りきると、高根台の住宅地となる。先ほどまでの景色とがらり雰囲気が変わる。

天候もよく、休日とあって車を磨く人を多く見掛ける。赤や青の車がピカピカに光り輝く。僕の車は年に数えるほどしか洗車しないからきたないけど、君の自慢のスーパー軽自動車はいつもピカピカだよ。」

と靴は男の身だしなみとして、いつも磨いています。最近はお暇さえあれば心も磨くようにしてますよ。」「本当かなあ?」

高根台を通り抜ける沿道のツツジの花が咲く。ピンクやシロの花の色は実に鮮やかで、足を止めて二人で見入ってしまう。

「ついこの前まではウメにサクラ。今はツツジ。花を見ながら一年中歌が詠めますよね。」「どう一首。」「・・・・・・。今日はいい歌が浮かびません。」「えっ?」

ツツジの花道を通り、先を急ぐ。東浦町側から知多半島道路をぐるぐるメイツ巽ヶ丘のマンション周辺まで歩を進めた。地図を見ると東浦町と知多市の境界が複雑に区切られる。名鉄巽ヶ丘駅まできて今回のぶらり旅を終える。

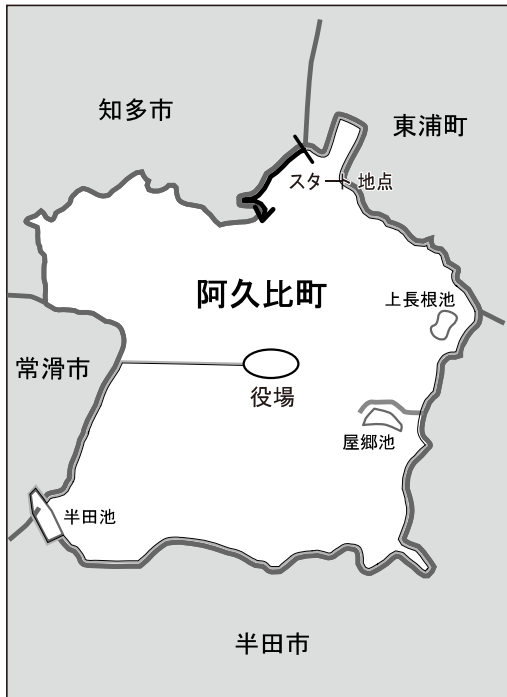
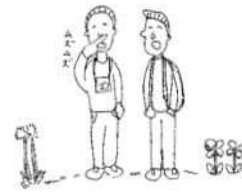
次回につづく。



阿久比町と東浦町の境界地点

シリーズ

阿久比を歩く ㊦



結芽木橋付近

今回は名鉄翼ヶ丘駅付近からスタート。駅は知多市地内。県道名古屋半田線を横断して商店街を南に向かい阿久比町に入る。境界は県道から少し西にある細道に続き、民家の敷地内にも入り組む。
バラやパンジーなど民家の庭には色とりどりの美しい花が咲く。空は五月晴れで気候は抜群だが、二人とも鼻が「ぐじゅぐじゅ」。敏感な私たちは春先のスギ・ヒノキの花粉に

境界線を行く ㊦

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

代わり、イネ科の花粉に反応しているようだ。「ハックションン」。何か冷たいものが顔に飛んできましたよ」と友人が嫌な顔をする。「ごめんごめん。外だから開放感いっぱいとおもいつきりくしやみがしたくてね。次は手で押さえるよ」。「お願いしなすよ。もー」。
田畑が広がる。水田には等間隔に稲が植えられる。目の前の畑では夏野菜が育てられ、紫色したナスのつるが支柱に巻き付く。季節は春から夏への準備が進む。
砂利道を歩く。遠くに幼い男の子とお父さんが小川をのぞき込む姿が見える。タモで何かを捕まえようとしている。
二人に近づき「何かいるの?」と尋ねると、男の子は必死でタモを動かす。お父さんは「へびがいたんですよ。この子はなぜだか分かりませんけどへびが大好きなんです。そうだよなあ」「うん」。満面の笑みを浮かべながら子どもはうなずく。「頑張って捕まえたから見せてよね」と友

人は男の子を激励していたが、へび嫌いな私は小さな声で「じゃあね」と恐る恐る手を振って、その場から離れた。
険しい道を進む。どこへ行っても雑木林、田、畑ばかり。遠回りをして知多市の佐布里地内の道を地図と二人の「感」だけで歩く。
「さっきの男の子に負けじと、へびならぬ伝説の生き物「ツチノコ」でも探しましょうか」と友人が冗談のつもりで話し掛けてきた。今は境界を探ることが最優先だ。私が命令口調の言葉を返すと、「ラジャー。分かりました」。友人は敬礼をして一歩後ろに下がる。
何とか阿久比町まで戻ってきた。二人とも鼻水ダラダラで体調が優れない。結芽木橋付近で今日のぶらり旅を終えることにした。「ハックションン」。鼻にティッシュを詰めて家路を急いだ。



へびを捕まえようと夢中になる親子

シリーズ

阿久比を歩く ⑦



何やら会話をしている？カモたち

知多市との境界から少し離れてしまつたが、結芽木橋付近から白沢地区の民家の間を通り、遠回りして県道白沢八幡線を目指す。
梅雨の季節が到来。道沿いにアジサイの花が色付く。赤、青、それとも紫か。完全に咲くまで色がはっきりと分らない不思議な花だ。土が酸性かアルカリ性かで微妙に花の色が変化するらしい。「僕は女性と話すとき、顔がすぐに赤くなつてしま

境界線を行く ⑥

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

うんですよ。アルカリ性が強いからでしょうかねえ。友人が首をかしげる。「アルカリ性なら健康と云うことだよ」という私の一言に、友人はニツコリうなずく。
県道白沢八幡線にぶつかる。道は阿久比町と知多市を二分して続く。高台から草木地区の町並みが一望できる。蓮池配水場と草木グランドを横目に進む。四月下旬に農業まつりでこの周辺を訪れた際、田んぼ一面レンゲ草の花が広がっていたが、今は稲の植わった水田へと様変わり。私たちの足音で、オタマジャクシたちが水しぶきを飛ばす。
ウメやビワの木には、枝が折れそうなほど、たわわに実がなる。カラスがビワの実を口ばしで突く。
乙ヶ脇下池の方から飛んできたカモ五羽が、水田に降り立つ場面に出くわす。稲と稲の間を器用に、すり抜けるようにして泳ぐ。
「グワツ、グワツ」「グアー、グアー」「やつら、何話してるんでしょうね」「え・・・」。「気になる

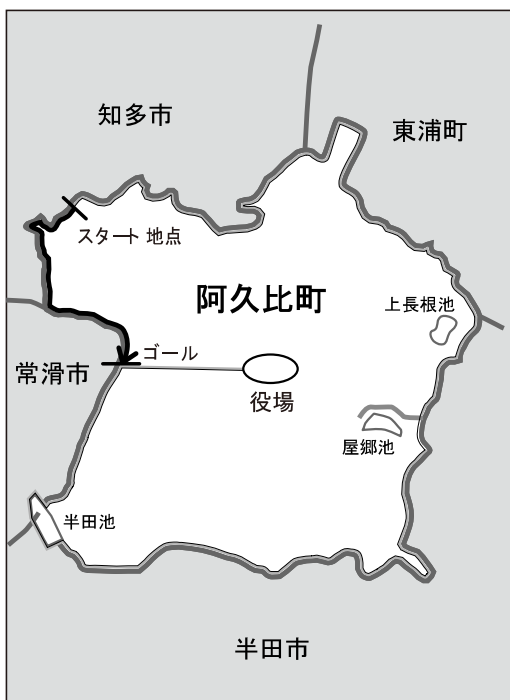
なあ。人が話していることが気になつてしょうがないんですよね。」「あそこにいるのは人じゃなくて、カモだよ。」「そうなんですけどね。(ブツブツ・・・)」。カモたちはしばらくすると別の場所に飛び立つ。愛知用水路と平行に進む。進路方向右手に知多市地内にある佐布里池が見える。水の色は濃い緑。大きな池で眺めもいい。静かな池を遠くから眺める。
用水路に沿えば、境界線を行けそうだが、危険を伴うので安全な道を歩く。県道西尾知多線に出て、多賀神社の前まで進み、今回のぶらり旅を終えた。
いよいよゴールが見えてきた。「ファイト」「一発」。次回に備え、気合いを入れて友人と別れた。



白沢八幡線から見える草木地区

シリーズ

阿久比を歩く⑦



愛知用水幹線水路

前回まで進んだ多賀神社から歩き始める。県道西尾知多線を少し行くと知多市との境界の看板にぶつかる。左手に曲がり、愛知用水幹線水路沿いを進む。

水路では水の流れとは逆にアメンボが水面を飛び跳ねる。「アメンボは何であんなことができるんだろうね」「体重が軽いからだと思いますよ」。友人のおバカ解答に笑う。静か草木池周辺をぐるりと回る。静か

境界線を行く⑦

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

なため池だが、時折カエルが「ウオーン。ウオーン」と、どすのきいた鳴き声を響かせる。小石を一つ池に投げてみる。鳴き声が止まる。池に背を向けて歩き出すと、「ウツオーン。ウツオーン」。先ほどよりも大きな声でカエルが鳴き出す。「あの鳴き声、怒ってるぞ」。振り向かず先に急ぐ。

しばらく用水路沿いを進み、県道金沢線に出る。花かつみ園の公開六月四日(十八日)を知らせるのぼりが目立つ。「幻の花はなかつみ」の旗が風に揺れる。東へ少し行った場所に花かつみ園はある。一休みすることにする。

室町時代に伯耆の国鳥取県西部)から草木地区の下芳池に移植されたと伝えられるノハナシヨウブを阿久比町では「花かつみ」と呼ぶ。永禄三(一五六〇)年桶狭間の合戦の際に、徳川家康の生母於大の方が、坂部城で「花かつみ」を「勝つ」という言葉にあやかり、仏前にささげて家康の武運長久を願ったという伝説

も残る。何度も絶滅の危機に見まわれたが、現在は地区の「花かつみ保存会」により大切に守られている。

小ぶりの花だが鮮やかな紫色は美しい。ぼんやりと花を眺め、汗が引いたところで腰を上げる。

境界に戻る。阿久比町、知多市、常滑市の三つの地点が交差する場所を通過する。草木工業団地の南側を歩く。工場の従業員の車が駐車場に止められている。数の多さに驚く。

三カ月前から始めた、「境界線を行く」のシリーズもついにゴールが見えてきた。スタートした地点まであとわずか。季節は春から初夏へ様変わり。珍道中での出来事が走馬灯のように浮かぶ。

「いろいろあったよね。お疲れさま」と友人をねぎらう。「一番の思い出はアメンボの素晴らしい水面飛びを見たことですね」「えっ。それ今日の出来事じゃなかった?」。その瞬間ゴールを迎えた。



カエルの声が聞こえた草木池